

言語と文学(Ⅳ)

一 日本文学海外進出と日本文学作品英訳の問題 一

析原知雄

〔Ⅰ〕

第二次世界大戦後、日本文学の海外進歩が目立って来て、多くの日本文学作品が英訳され出した。第二次大戦後、英語に翻訳された最初は、大仏次郎作「帰郷」(“Homecoming”)で、New YorkのKnopf社発刊のものであって、続いて、三島由紀夫、大江健三郎の諸作品であった。ユネスコ協会推薦の日本文学は、上記の「帰郷」の外、「枕草子」「太平記」「保元物語」「宇治拾遺物語」「能楽二十選」「落窪物語」「雨月物語」島崎藤村作「破戒」、徳富蘆花「思出の記」谷崎潤一郎「細雪」「瘋癲老人日記」遠藤周作「おばかさん」「平家物語」「源氏物語」等があるが、それ以前にも以後にも他の作品が英訳されている。

1968年には、日本文化研究国際会議(International Round Table on the Relations between Japanese and Western Arts)が開催され、(日本人16名、外国人16名、記念講演者3名、オブザーバ数人を含む)会合が東京と京都で実施され、文学作品に関する議論が行われた。今日では世界各国の文学は、それぞれ孤立して、国語と国境によって限定されているというのは、も早古い考え方であるといわれている。世界各国の文学は絶えずお互いに影響しあい、又、交流し、相互影響のあり方が研究されている。

「東は東、西は西、両者の出会うことはない」というRudyard Kiplingの詩の第一行がよく引用された時期があったが、Kiplingはそれに続いて、“But there is neither East and West, Border, nor Breed, nor Birth, …”「だが、東も西もなく、国境も、人権も、生れもない。」“When

two strong men stand face to face tho' they come from the ends of the earth!”「二人の強い男子等が面とむかって立つ時に、たとい地の両端より来るとも」と詩で述べていることを忘れたくない。文学作品は普遍的な人間性(human nature)を写しているから、その根本理念において、古今東西に通じて同じものがある筈であって、世界の文化財である文学は、言語牆壁を超えて交流すべきであろう。外国文学が日本でいかに鑑賞されるかと同様、日本文学がいかに外国で鑑賞されているかは、今日における重要な文学研究といえることができるであろう。日本文学の翻訳が、古典と現代作品を通じて、行われているのは、世界の文学が国際性をましていることだといえるであろう。日本文学が外国語に翻訳されて読まれていることは各国の人々が、共通な人間性のため、共通な心意感情を体験していることを示すものといえてよいであろう。日本古典文学の英訳は主なものあげてもかなりの数にのぼっている。古事記、古今集、紫式部日記、土佐日記、更科日記、枕草子、源氏物語、落窪物語、竹取物語、宇治拾遺物語、保元物語、平家物語、住吉物語、方丈記、徒然草、謡曲(能、狂言)、俳句、東海道中膝栗毛等、更に最近では各種のものが手がけられているということである。

〔Ⅱ〕

文学作品(小説、特に詩歌)の翻訳ということについては、諸種の問題が発生する。高度の表現自体に価値を求めない非文学的文章、表示的な言葉によって論理的に構成された文章のような場合には、翻訳は、原理的に正確が目標であって、正確に訳されておれば問題はないが、文学作品の文

体を翻訳することになると、簡単にはすまされないものである。今日迄、多くの翻訳論が書かれ、翻訳に関する様様の見解が述べられ「翻訳可能論」或は「翻訳不可能論」、「翻訳有用論」、時に「翻訳無用論」が展開されるのをみて来た。勿論、厳密な立場からすれば翻訳は可能ではないであろう。古くローマの時代にさかのぼることになるので、よく「否定論」の立場にある人達の引用する Latin 語の “Traduttori, traditori” (英語に訳せば “Translators are traitors” ということになるのだらう。翻訳は解釈不可能な問題を解決しようという試みだということになるのだらう。だが、それにもかかわらず、翻訳は心要なのであって、いずれの人達といえども、外国語を自国語と同様、或は自国語に近く親密に読み得る読者は極めて少数だといわねばなるまい。従って、外国文学の鑑賞、或は進んで研究を行う場合に今日の段階においては、優秀な翻訳の活用ということが肯定されてもよいわけであらう。今日迄、外国文化の摂取は、原作品を原語で親密に読み得る文学研究者、或は文学者、批評家などを除いては、翻訳書を通じて行われてきていると思われるのである。優秀な翻訳書が、日本文化においてどのような大切な役割を果たしているかは誰もが知るところであらう。只今日、翻訳氾濫という時点においてなされる翻訳が秀れているのいうことが大切であり、又、何が翻訳されるか、何が翻訳されねばならぬかが問題である。今日、多くの秀れた翻訳があり、翻訳者のあることを知るべきであらう。出来得る限り、内面的に原作者の精神をくみとり、原作者にそうさせた表現を敏感に発見し、それを翻訳者自身の言葉で表現することに努めている翻訳者を求めることが益々必要となってくるであらう。

〔Ⅲ〕

Edward Seidensticker 教授の「源氏物語」 (“The Tale of Genji”) の全訳が、昨年 (1978年) タトル社 (Tuttle) から出版されて、日本の読者 (或は世界の読者) にも入手が容易になったのを機会に、その翻訳に関連して、翻訳の問題について考察をしてみようと思うのである。

先づ、秀れた文学作品を翻訳するには、翻訳者

の資格というものがある筈であって、その資格とは、第一に語学の正確な知識と言葉の運用の秀れた能力が必要であること、第二に、翻訳すべき作品を、その原作に書かれている国語で、十分理解し、鑑賞することの出来る能力の所有者でなければならぬという明白な事実がある。しかも、その翻訳態度にも、二つの傾向があると思われる。その一つは、原作者を重視して、出来る限り原作に忠実になろうとする態度、つまり「受容的態度」と、今一つは、読者を重視して、読者側の理解と趣味を考慮して翻訳しようとする態度、つまり「適合的態度」とがあるといつてよからうと思う。

翻訳に対する理論を後にして、先づ最初に実例を二つ三つ次にあげることから始めよう。Seidensticker は、この資格を十分そなえている秀れた学者である。Seidensticker の翻訳の前に、既に、Dr. Arthur Waley の有名な「源氏物語」 (“The Tale of Genji”) があって、Waley も秀れた東洋文学に関する学者で、この翻訳もタトル社から出版されて、入手が容易になった。読者は、「源氏物語」の原文を基にして、この両者の英訳を比較して読むと興味あることであり、又、翻訳の仕方について、色々と教えられるところを発見するだろうと思う。

「いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ける中に、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めき給うありけり。」—(桐壺)

- (a) “At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest;—” —(Waley)
- (b) “In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others.” —(Seidensticker)

「前の世にも、御契りや深かりけん、世になくきよらかな玉の男皇子さへ生れたまひぬ。」—(桐壺)

- (a) “In due time she bore him a little

Prince who, perhaps because in some previous life a close bond had had joined them, turned out as fine and likely a man-child as well might be in all the land.”

——(Waley)

- (b) “It may have been because of a bond in a former life that she bore the emperor a beautiful son, a jewel beyond compare.”

——(Seidensticker)

更に興味を添えるために、次にこの個所の谷崎潤一郎訳と与謝野晶子訳をあげる。

「そのうちに、前の世からのおん契りが深かったのでしょうか、またとなく清らかな玉のような男御子さえお生れになりました。」

— (谷崎潤一郎)

「陸下と桐壺の更衣の間に一男子が生れた。美しく玉のやうな皇子である。」

— (与謝野晶子)

読者は以上の翻訳読了後、翻訳というものが、その訳者によって如何に異なっていて、特徴がでるものであるかを感じ取ることだろう。

Waley の訳が分冊から二巻本にまとめられて出版されたのは1935年のことだったが、正宗白鳥が、Waley 訳の「源氏物語」を読んで、その面白さを知ったと告白したことがあった。前例の(a)(b)の二者の翻訳の訳し方を比較してみるとその相違がわかるだろうが、Waley 訳の文体はいたって精妙で、文体が巧緻を極めていいる。そして時には、それが人工的技巧に流れることもある。そして、Waley は作中の和歌をそのまま詩として訳さないで、会話のなかに組み入れたり、会話の応答の言葉として散文(Prose)で書いている。

Seidensticker の翻訳の方は、原文のリズムを捉えようと努力をしていて、(前文の例のみでは十分ではないが、全訳を通して読んでみると)その長所といえば、「潑瀨として簡潔」である点である。これは Waley の英語が King's English で、

Seidensticker の英語が President's English だという点からばかりではないので、その翻訳態度によるものが大きいと思われる。それに、この両者の国の文学的伝統や歴史風俗とも関係がないとはいえないだろう。Seidensticker は作中に出る和歌を、会話の応答としないで、そのまま詩として簡潔に訳している。その例を「若紫」から二つあげてみよう。

宮人に 行きて語らん 山桜

風よりさきに 来ても見るべく

“I shall say to my city friends:

Make haste to see

Those mountain blossoms.

The wind may see them first.”

吹き迷う み山おろしに 夢さめて

涙もよほす 滝の音かな

“A wind strays down from the hills
to end my dream,
And tears well forth at these voices
upon the waters.”

こうして簡単ではあるが、両者の翻訳を比較考察してみると、(更に比較を徹底的に行う為には、更に多くの実例を引用し、その翻訳態度と、その文体を検討すべきであるが、紙面の関係上、他の機会をまつことにして、)前者、Waley は、「受容的態度」が濃く、後者、Seidensticker は、「週合的態度」を示して、欧米人には想像のつかないと思われる事柄に関しては、時に省略して簡潔に訳そうとしている。両者共、いづれにしても、一般の日本人の読者にもまして、この日本の古典を読み取り、日本的美意識をも感得して、両者の特徴ある文体で見事に訳出しているのである。「源氏物語」の原文と英訳と比較しながら読み進むのも一興だろうと思う。それにしても古典はその原文で十分読み取ることが必要であることは言うまでもない。

最後に理想的な翻訳とはどういうものだろうかという問題が残るだろうが、いうまでもなく完全無欠の翻訳などというものは、どのように秀れた翻訳者であろうと、不可能なことといわねばならないだろう。同系語族の近代語の文学作品を翻訳する際、等量に移し替えることさえ、困難は測り知れぬものがある。作家の文体を外国語から自国語に完全無欠に移し変えられる筈もないが、それでも、自国語でなるべくその文体の特質が感知できるような文体を創り出すよう最上の努力をしなければならない。これは努力だけではなく、言葉を存分に動かし使い得る能力の所有者であることが望ましい。翻訳は又、一種の創作でもあらうから、原作に、ひたすら愛着を感じ、原作にあくまで忠実でなければならない。翻訳はそれ自身“a creative art”であらう。翻訳者はできる限り、伝説上の(“mythological”)歴史的な(“historical”), 社会的な(“social”)伝統に敏感であって、翻訳に使用する言語は、響をも、リズムをも、表現は勿論のこと、カラー(色彩)をも、そして連想をも伝えるように努力すべきであらう。翻訳者は原作のフォーム(“form”)とマター(“matter”)に自分自身を捧げつくさねばならないのである。

〔Ⅳ〕

日本の古典の一つである「平家物語」を取り上げる。日本には実に豊富な(voluminous)古典文学作品が多々あるが、末だ充分翻訳されておらず、外国人に知られているものは少ないのである。近代の文学作品は、川端康成のノーベル賞前後から可かな多くが翻訳されて来てはいる。しかし、今後も優れた作品は益々翻訳され、日本人の世界への経済進出のみでなく、日本の文化が、文学が、更に深く世界へ紹介されることを願うのは筆者のみではなからうと思う。“To know a nation really must read its literature”であって、一国の国民

性や文化を知る為には何よりもその国の文学に接することが重要である。文学は「心」が投げかけるもので、心(soul and heart)を知る為には、文学に向わねばならないのである。人間の心の奥にあるものを文学が表現するならば、必ずや普遍性というものがあるに相違ない。普遍性というのは、心に徹底し、その境遇と時代に徹し、更にその国土に徹底してはじめて生まれるものであり、そしてそれが世界的となるのである。Shakespeare を Goethe を Dante をみれば明白であらう。

今日、日本の「源氏物語」が前回、述べたように、秀れた翻訳が二種類も出て、英文で読まれているのであり、その他、川端康成、その他の現代作家、古典文学も数種翻訳されて来ていて、外国の作品を日本語に翻訳するばかりでなく、日本文学の秀れた作品が翻訳されつつある。只、数回繰り返して来たように、翻訳における言葉の問題が課題となるのであって、同系語族の近代語の文学作品を翻訳する際、等量に替えることさえ、困難な測り知れぬものがある。作家の文体を外国語から自国語に完全無欠に移し変えられる筈もないが、殊に詩歌の律動を移せるわけもないが、それでも、その文体が感知できるよう最上の努力をなすべきなのである。これは困難を極める課題であるが、翻訳者はできる限り(そのためには、翻訳者は二国の言葉を存分動かし、使い得る能力の所有者であり、伝説上の(mythological), 歴史的な(historical), 社会的な(social)伝統に敏感な所有者でなければならないが)、原作のフォーム(form), マター(matter)に自分自身を捧げつくさねばならないのである。

今回、取り上げる「平家物語」の翻訳は、A. L. Sadler, M. A. のもので(Charles E. Tuttle Company 出版)、日本の風俗習慣や日本の歴史や、日本に関する知識を所持していなければならないのである。紙数の関係もあり、その一部をあけて、その翻訳を鑑賞してみよう。

「平家物語」の冒頭の一句は、まさに、全巻の底を貫く思潮を端的に表現した名句であるのは周知のことである。しかし、英語に翻訳することは容易なことではない。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、
沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。
奢れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し、
猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

The sound of the bell of Jetavana
echoes the impermanence of all
things.

The hue of the flowers of the teak-
tree declares that they who flourish
must brought low,
Yea, the proud ones are but for a mo-
ment like an evening dream in
springtime.

The mighty are destroyed at the last,
they are but as the dust before the
wind.

祇園精舎の鐘の音は宇宙一切の現象は
変転するという音がし、沙羅樹の花の
色は、勢の盛んな者は必ず衰えるとい
う理法を示している。そのように、高
ぶっている者は長続きしなくて、ただ
春の夜のように短いのである。

勇猛な者も、つまりは滅びてしまって、
丁度風の吹くところにある塵のよう
にはかないものである。

英文中の“Jetavana”という語に、訳者は、“The monastery park of Buddha at Sāvattthi”と注をつけている。この冒頭を翻訳することは困難だろうが、次のようなところは困難を感じない。例えば、敦盛最期の時の場合で、直実が、我が子小次郎が薄手負うた時でさえ、心苦しく思ったのに、十六・七ばかりの容顔美麗な敦盛の首を掻き切った場面の次の個所など気楽に訳されている。

熊谷餘りにいとほしくて、いづくに刀を立つ
べしとも覚えず、目も昏れ心も消えはてて前

後不覚に覚えけれども、さてもあるべきこ
とならぬば泣く泣く首をぞ掻いてける。「あ
はれ弓矢取る身ほど口借しかりけることはな
し。武芸の家に生れずば何しに只今かかる憂
き目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるも
のかな」と袖を顔に押あてさめざめとぞ泣き
居たる。

— he could scarcely wield his blade,
hardly knowing what he did, at last cut off
his head. “Alas!” he cried, “what life is hard
as that of a soldier?”

Only because I was born of a warrior fami-
ly must suffer this affliction! How lament-
able it is to do such cruel deeds!” And he
pressed his face to the sleeve of his armour
and wept bitterly.

verse 以外のところは、因難なく気楽に訳して
いる。翻訳者の Sadler も序文の中で言っている。
五・七の日本の metre (格調韻律) は当然、英文
ではうつし出されない。

“The verses that occur in these texts have
been put into the same form as the
Japanese metre of five, seven, five, seven,
syllables. Unfortunately it is impossible to
represent in any other language of Japanese
verse, so much of the meaning must neces-
sarily be lost.”

〔V〕

「平家物語」と「方丈記」は、十三世紀におけ
る日本文学の傑作 (the masterpieces of
Japanese literature) であって、訳者 A.L. Sadler
もそれを認めたのであろう。先づ、題目の「方丈記」
を“Hō Jōki or Ten Foot Square Hut”と訳し、序
文で次の様に述べている。

“The Hōjōki consists of the reflections of a
recluse who had retired in disgust from a
world that was too full violent contrasts

and cataclysms, both of animate and inanimate nature, to allow a sensitive person to find it at all tolerable.”

この序文に書かれた一節は「方丈記」の性格を巧みに述べているといえる。

常に筆者が述べていることだが、一国の国民性や文化を知る為には何よりもその国の秀れた文学（作品）に接することであり、文学は「心」を投げかけるもので、心（heart and soul）を知る為には文学に向かわねばならないのである。人間の心の奥にあるものを文学が表現するならば、必ずや普遍相というものがある。『方丈記』には「無情感」或は「無常観」というものが流れているが、これは日本心にのみあるものではなく、遠く、ギリシヤの昔から流転しているのであって、哲学者ヘラクレイトス（Hērakleitos. 紀元前540年頃—480年頃）の言葉にもあるので、英訳すると“All is flux, nothing stays still.”（「万物は流転し、静止するものなし」）というのがある。又、英国の作家として知られているスウィフト（Jonathan Swift. 166—1745）が、次のようにしているのも同様である。即ち、“There is nothing in this world constant, but inconstancy.”（「この世にあるもので、定まったものは何もない。あるのは定まらぬものだけである。」）

「方丈記」でも、周知のごとく、この世の無常を、河の流れと、よどみに浮ぶ水の泡にたとえている。「方丈記」の書き出しの文体（style）は、充実した量感に満ちていて、そのなめらかなリズムは声を出して読んでみれば、その見事さは、日本人なら誰でも感じることができるであろう。

「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しく止まりたる例なし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。……」

“Ceaselessly the river flows, and yet the water is never the same, while in the still pools the shifting foam gathers and is gone, never staying for a moment. Even so is man and his habitation.”

Sadler は、実に簡潔に訳している。そして、できる限り、日本語のなめらかなリズムを英語に

うつそうとしているようである。しかし、外国語で書かれた文体を、母国語にうつすことの困難さは、今更あらためて述べる必要もない。前回にも述べたように、同系語族の近代語の文学作品を翻訳する際、等量に移し替えることさえ、その困難は測り知れぬものがあるのに、まして、詩歌や古文の律動まで移せるわけもない。訳者は、原文体になるべく感知できるように最上の努力をなすべきなのである。Sadler の苦心を買いたい。更に他の一例をあげると、

「知らず、生まれ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り、誰がために心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と栖と無常を争ふさま、いはば、朝顔の露に異ならず。あるいは露落ちて、花残るといへども、朝日に枯れぬ。あるいは花しぼみて、露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。」

“And this man that is born and dies, who knows whence came and whither he goes? And who knows also why with so much labour he builds his house, or how such things can give his pleasure? Like the dew on the morning glory are man and his house, who knows which will survive the other? The dew may fall and the flower remain, but only to wither in the morning sun, or the dew may on the withered flower, but it will not see another evening.”

Sadler の英訳から外国人も充分、本質的に亡びゆく美しい形相を充分読みとることができるであろう。東西を問わず詩人の魂というものは共通なものがどこかにあるものであろう。「方丈記」の心が外国人にも感じ取れるであろうか、又仏教からの無常観がわかるであろうかと人は言うかも知れないが、Sadler は序文の最後のところで次のように述べている。

“Buddhist sentiments play the same part in these narratives as the christian religion does in the medieval literature of Europe, but, since they are philosophical, do not produce the fanatic frame of mind that de-

rives from religion.”

仏教やキリスト教に関心を持つ程の読者であれば、その相似点と相違点に興味をもつであろう。終りに近づくと長明の次の「言」に出合う。

「それ三界はただ心一つなり。心もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、宮殿樓閣も望みなし。」

“Now the Three Phenomenal Worlds, the World of Desire, the World of Form, and the World of No-form, are entirely of the mind. If the mind is not at rest, horses and oxen and the Seven Precious and Palaces and Pavilions are of no use”

こういう主旨の言葉をきくと、ダンテ (Alighieri Dante.1265-1321) の神曲 (“Divina Commedia”) にしるされている深い意味を思い出す。又、趣味生活の面でいうと、英国の作家キッシング (George Gissing.1857-1903) の “The Private Papers of Henry Ryecroft” と相通ずるところがある。Sadler の英訳を読んで、再び「方丈記」の原文を読み直した。Sadler は、原文の意味と格調を伝えようと努めている。

〔Ⅴ〕

川端康成 ノーベル賞受賞記念講演の英訳は Edward G. Seidensticker 教授によるもので、秀れた翻訳の一つである。同教授は、周知のように、既に「源氏物語」や「伊豆の踊り子」「雪国」その他を英訳し、翻訳言語の壁を乗り越えて、ノーベル賞受賞の天窓を日本文学のために開いてくれた秀れた日本文学研究者である。これも周知のことであろう。

翻訳の問題に関しては、度々論述を重ねてきたのであるが、翻訳者の仕事は原作者の仕事よりも、はるかにきびしいものである。原作者は、ある思想を、ある感情を、ある情緒を表現する場合、自分の国語の中に多くの「ことば」が用意されていて、その中から最も適当なものを自分の好みに応じて選び出すことができる。更に、文学作品の場合は、殊に詩歌の場合は、機能的

な文章の場合や、理科系統の論文等のような種類とちがって、人間の感情と情緒が含まれているばかりでなく、風俗、習慣、文化などが背後にあって、その国語固有の心情を無視するわけにはいかないのである。更に「ことば」には、それぞれ国民特有の感覚がある。従って、ここに文学作品の翻訳のむずかしさがある。完全な翻訳というものは不可能だと言われるのである。

文学作品、殊に詩歌は、その国のことばで観賞するのが理想であることは当然だが、いづれの国の読者でも、外国語を自国語と同様に読みこなせるものは少数であるから、当然翻訳文学の必要と価値が生れてくるのである。そして、原作の “form” “matter” に自分自身を捧げつくす秀れた翻訳者が必要なのである。

Edward G. Seidensticker 教授は、最も秀れた日本文学の翻訳者の一人であって、ストックホルムで行なわれた川端康成のノーベル賞受賞記念講演は、「美しい日本の私」(Seidensticker 訳 “Japan the Beautiful and Myself”) という題であった。次に余白の関係上、その一端をあげることにする。読者はそれを観賞してもらいたい。

「……しかし別の古人の似た歌の一つ、僧良寛 (1758-1831年) の辞世、形見とて何か残さん 春は花

山はととぎす 秋はもみじ葉

これも道元の歌と同じやうに、ありきたりの事柄とありふれた言葉を、ためらひもなく、と言うよりも、ことさらもとめて、連(つら)ねて重ねるうちに、日本の真髄を伝へたのであります。まして、良寛の歌は辞世です。……」 “—And yet very similar is the deathbed poem of the priest Ryokan (1758-1831):

What shall be my legacy?

The blossoms of spring,

The cuckoo in the hills,

the leaves of autumn.

In this poem, as in Dōgen's the commonest of figures and the commonest of words are strung together without hesitation — no, to

particular effect, rather —and so they transmit the very essence of Japan. And it is Ryokan's last poem that I have quoted."

講演の最後の部分をもう一つあげておこう。

「私の作品を虚無と言ふ評価がありますが、西洋流のニヒリズムという言葉はあてはまりません。心の根本がちがふと思ってるます。道元の四季の歌も『本来の面』と題されてをりますが、四季の美を歌ひながら、実は強く禅に通じたものでせう。」

"My own works have been described as works of emptiness, but it is not to be taken

for nihilism of the West. The spiritual foundation would seem to be quite different. Dogen entitled his poem about the seasons "Innate Reality," and even as he sang of the beauty of the seasons he was deeply immersed in Zen."

教授の翻訳態度は、「源氏物語」の翻訳の場合と同様、欧米人によくわかるように「適合的」態度で、明快に訳し出している。英語でなるべく原作の文体が感知できるように最上の努力をはらっているといっても過言ではないであろうと思う。

(1983.10.15)